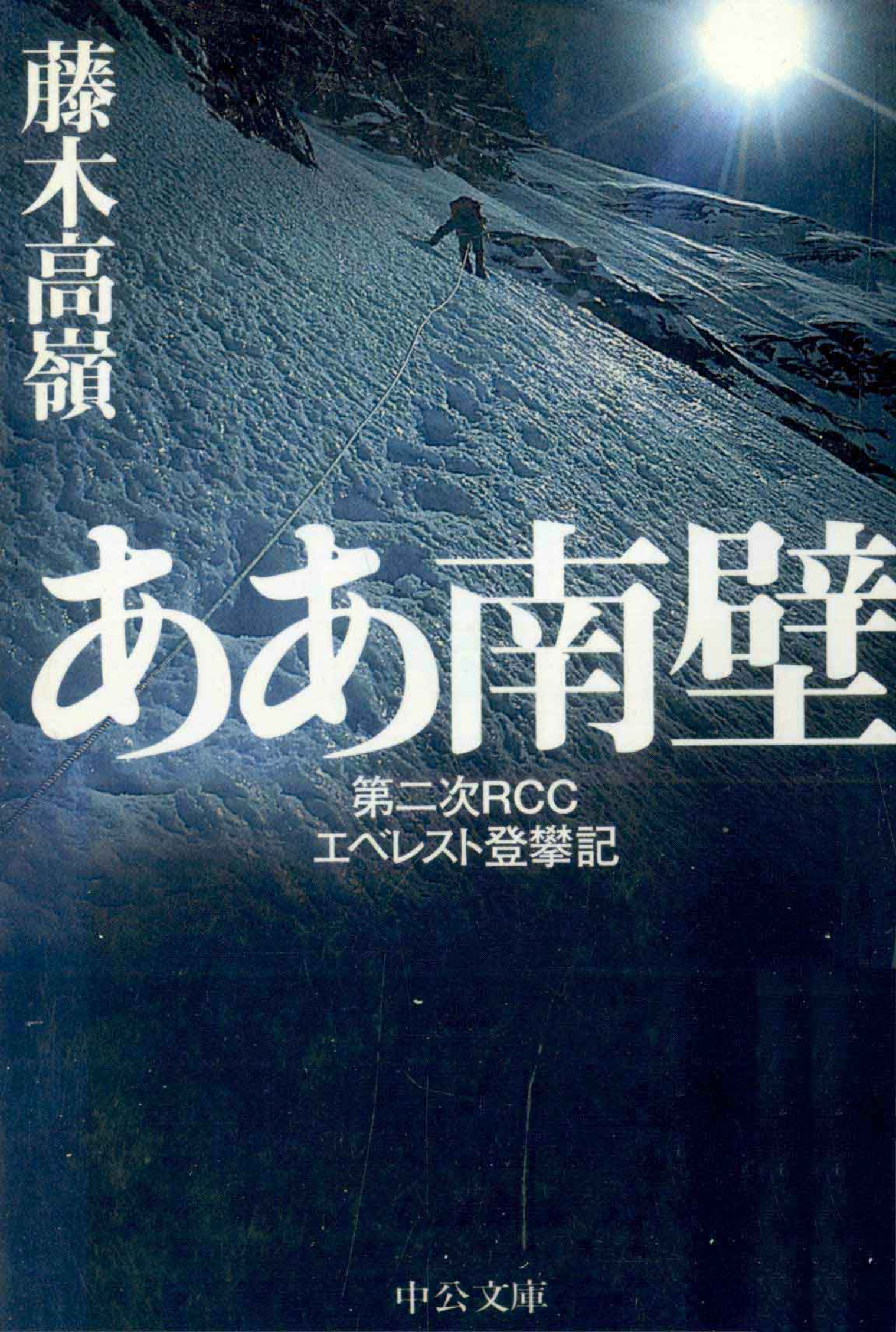


藤木高嶺

ああ南壁

第二次RCC エベレスト登攀記

中公文庫

日本音楽著作権協会(出)許諾
第9705697-701号

中公文庫

ああ南壁　第二次RCCエベレスト登攀記

定価はカバーに表示してあります。

1997年6月3日印刷
1997年6月18日発行

著　者　藤木高嶺

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Takane Fujiki

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202878-7　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

ああ南壁

第二次ＲＣＣエベレスト登攀記

藤木高嶺

中央公論社

目次

I エベレストへの道 13
登攀強行か？　断念か？　南壁に霊よ、ねむれ　イギリス人の執念　南壁挑戦の歴史　隊員発表　雨中のキャラバン三〇〇キロ　エベレストがちかぢかと……

II 一億円の大作戦 63
ベースキャンプ建設　エベレスト・ホスピタル　完璧な装備　兵糧作戦の明暗　心の友シェルパ

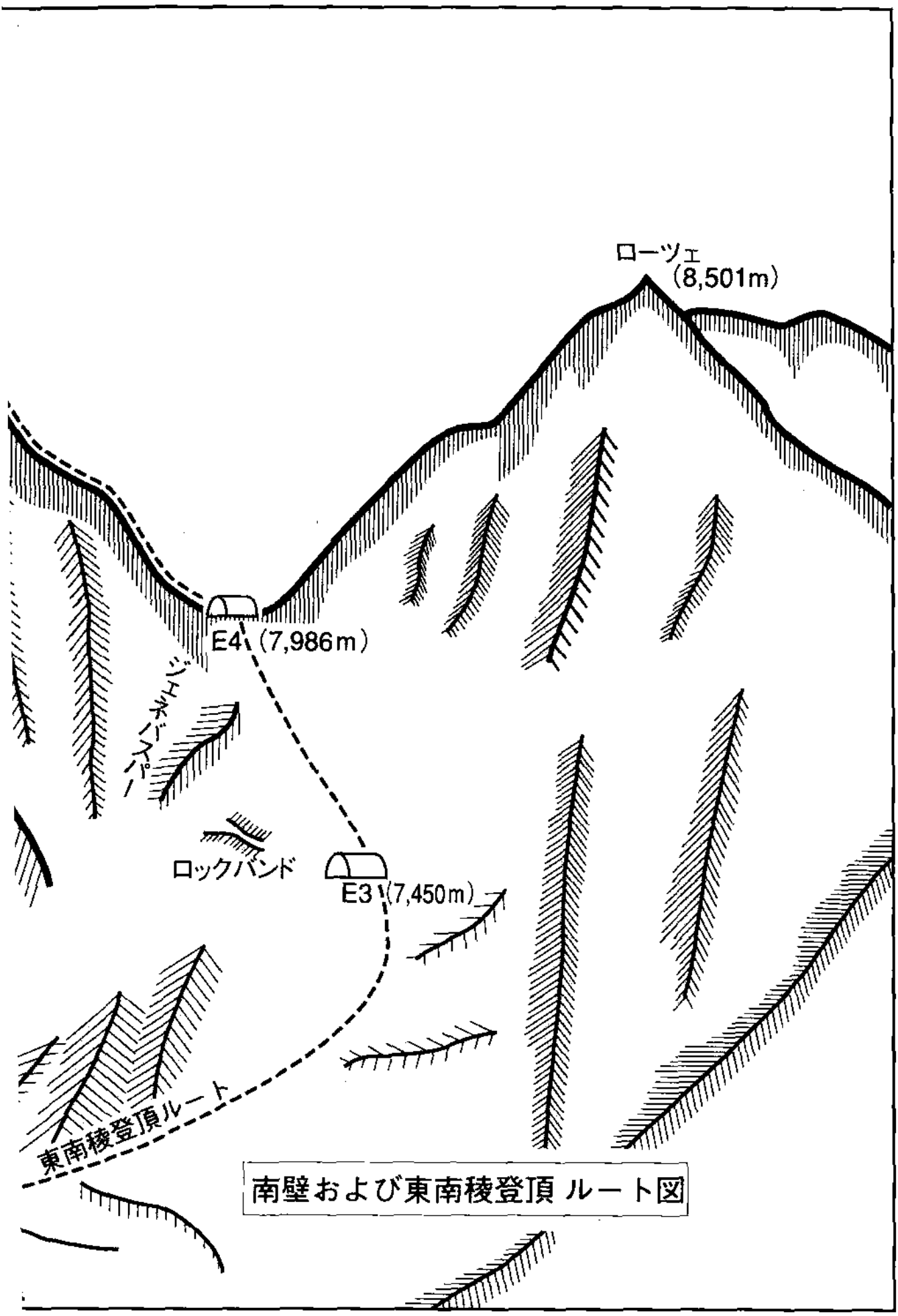
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

III 快進撃 99
魔のアイスフォール　ハシゴが消えた！　眼前を威圧する
南壁　緊急救出作戦　軍艦岩にとりつく　南壁のキーポイント　八、〇〇〇メートルに到達

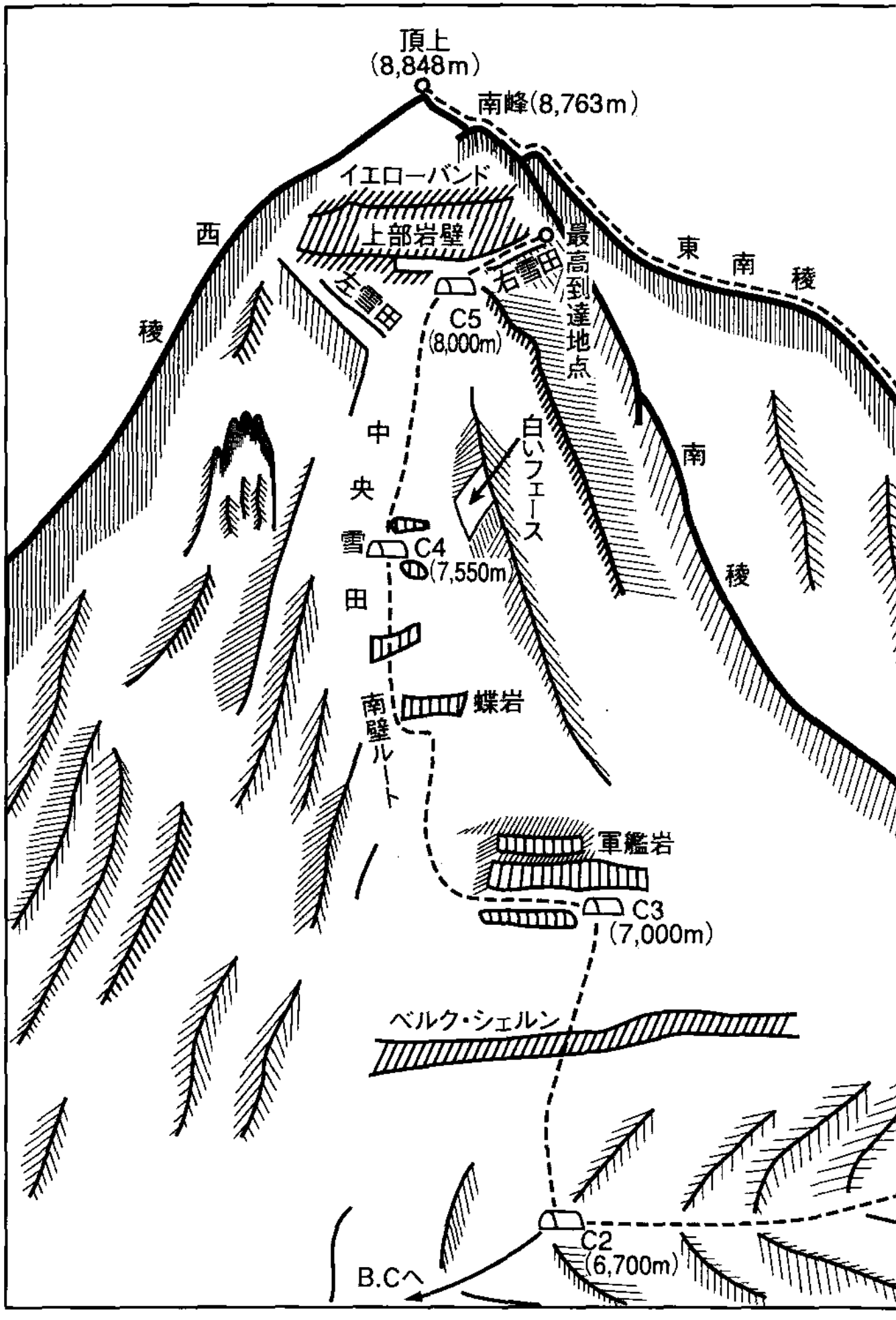
IV 障壁をこえて 145
襲う猛風雪と相次ぐ悲報　シェルパ、ザンブーの死　歌う山男たち　ベースキャンプのお客さん　二面作戦で前進開始　サウス・コルへ

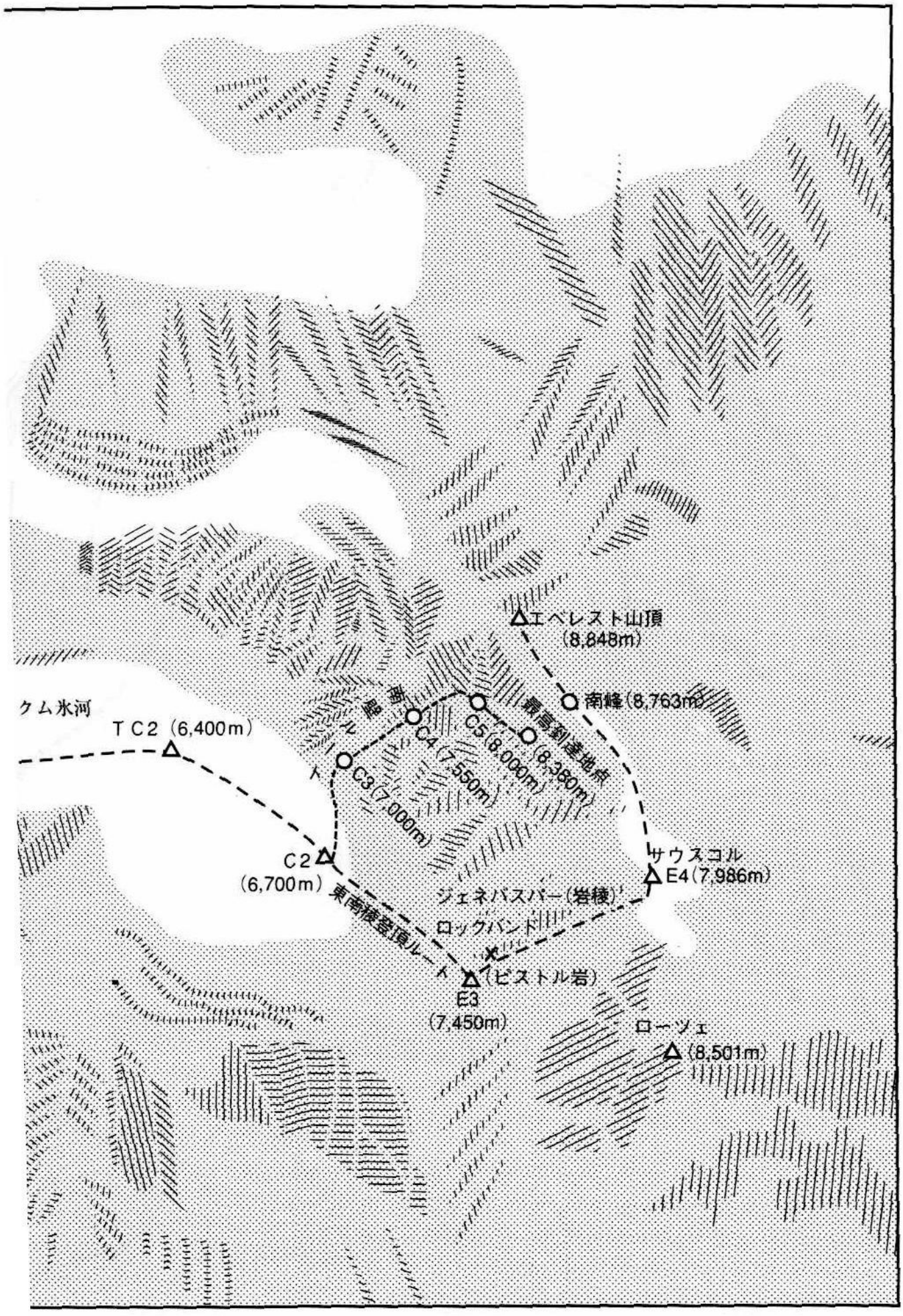
V 快記録達成 184
秋の初登頂に成功す　「あっ、眼が見えない！」　驚異の山上ビバーク　奇跡の生還

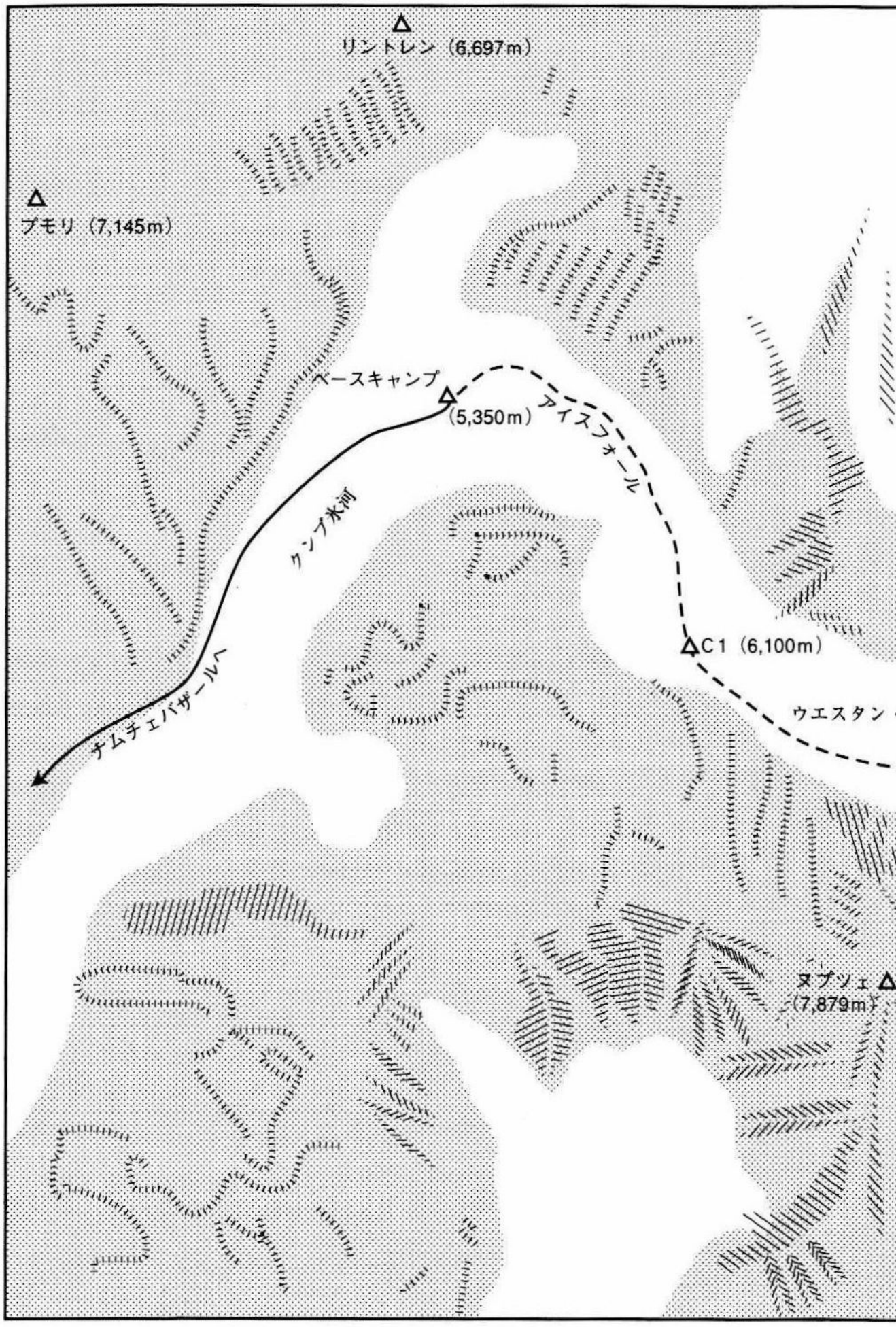
VI
ああ南壁
快晴を利して八、三〇〇メートル　南壁八、三八〇メートル
南壁突破を断念　撤収のとき　ヒマラヤに闘う親日娘
211
あとがき
242
「あとがき」の「あとがき」
245
〔付〕エベレスト登山・偵察隊の記録
254



南壁および東南稜登頂ルート図


頂上
(8,848m)
南峰(8,763m)
イエローバンド
上部岩壁
西
稜
左雪田
右雪田
最高到達地点
C5
(8,000m)
東南稜
中央雪田
白いフェース
C4
(7,550m)
南稜
蝶岩
南壁ルート
軍艦岩
C3
(7,000m)
ベルク・シェルン
C2
(6,700m)
B.Cへ


エベレスト山頂
(8,848m)
南峰(8,763m)
最高到達地点
C5(8,000m)
(8,380m)
C4(7,550m)
C3(7,000m)
南東稜ルート
クム氷河
TC2 (6,400m)
C2
(6,700m)
東南稜登頂ルート
サウスコル
E4(7,986m)
ジェネバスパー(岩稜)
ロックバンド
(ピストル岩)
E3
(7,450m)
ローツェ
(8,501m)



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ああ南壁——第二次RCCエベレスト登攀記

本文写真撮影――今井幹雄、藤木高嶺、
森田勝、石黒久、重廣恒夫
本文写真提供――朝日新聞社、藤木高嶺

Ⅰ エベレストへの道

登攀強行か？　断念か？

まる三日間降りつづいた雪がやんだ。ベースキャンプの風もいまはピタリとおさまっている。だが、上部キャンプでは、風だけは相変わらず猛威をふるっているらしく、暗やみを通してエベレスト西稜の稜線から「ゴーッ」というすさまじいうなりが、間断なく聞こえてくる。その風にさえぎられるように大きくなったり小さくなったり、さっきからひっきりなしにトランシーバーの声がなりひびいている。

「……こちらC2の××隊員。南壁は技術的には問題はないけれども、この風ではどうしようもない。あと十日間も天気が良ければ登りきれると思うが、そんなに天候がつづくことは考えられないような気がする。この際、残念だが、東南稜に主力をおいて登頂すべきだと思う。以上です。××君と代わります」

「……私の考えは、やはり私たちは南壁を登りにきたんだから、あくまでも南壁一本にしぼって全力をあげるべきだと思います。どうぞ」

「私も同じ考えです。たとえ南壁から頂上に登れなくても、登れるところまで登って力のかぎりをつくせば満足です。それがRCCの行き方だと思います。どうぞ」

「僕の意見としては、南壁は登れるところまで登って頂上は断念し、東南稜から少数精鋭主義で頂上をアタックするべきと考えます。とにかく頂上第一主義です」

トランシーバーを通じてC2（第二キャンプ）から隊員の意見がつぎつぎと流れてくる。各キャンプではブタンのキャンピング・ランプの下で、隊員たちがトランシーバーを中心に集まって、腕ぐみしながら熱心に聞きいっている。真っ黒な顔に緊張がみなぎり、なかには涙をうかべている隊員さえいる。

一九七三年十月十三日、午後七時すぎのことだ。

第二次RCC日本エベレスト南壁登山隊は、九月二十九日すでに南壁中央部の八千メートル地点に到達し、十月七日にはその地点にC5（第五キャンプ）を設営した。これは昨年秋の全英隊チームよりも、実質的に一ヵ月も早いペースだ。この快進撃が順調に進めば十月二十日までには登頂できる見通しで、その成功率は八〇パーセント以上と誰もが信じていた。モンスーンはとっくに明けたはずだし、五日間の快晴つづきでザイルはC5から右雪田へと快調に伸びつつあった。しかし十月八日の午後から天候は急変し、南壁上部は猛吹雪に見舞われた。

「モンスーンが明けたのだからこの悪天候も長つづきはしまい」という隊員たちの願いもむなしく、風はますます猛威をふるいはじめた。九日には危険を感じたC5の隊員二人がC2に脱出下山した。C4にいた森田、高見両隊員は逃げおくれてこの日から四日間も閉じこめられた。テントは破れ、雪まみれになりながら二人は耐えぬいた。脱出しようとしても、強風で動ける状態ではなかった。テントを出れば、おそらく木の葉のように吹き飛ばされていたであろう。

十三日昼すぎになって、わずかに風が弱まった。そのすきをねらって二人はC2に下山し、みんなをほっとさせた。しかし、その前日の十二日、C2ではC3に荷上げに向かったシェルパ七人が南壁下部で雪崩に遭うという事故が起きていたのだ。この雪崩で四人が埋まり、そのうち一人が行方不明となって、遺体はみつからぬまま死亡が確実となった。

C5、C4の破損と放棄、シェルパの死亡、悪天候が隊員たちに強いショックを与えたことはいうまでもない。特にC2は暗いムードに包まれ、隊員たちから笑顔が消え去った。誰が切り出すともなく隊員たちは今後の方針について語りあった。田中リーダーが「いっそのこと皆の意見を湯浅隊長に聞いてもらったら」と発言し、湯浅登攀隊長もこれに同意して、全隊員がそれぞれの意見を率直に隊長に述べるということにエスカレートしていったのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com